

序論：日本庭園の抽象枯山水庭園へのプロセス

1 日本庭園は自然石を使用した空間構成

日本庭園の素材は自然物であり、しかもその出来上がった造形も自然を写している。しかし、単に自然の造景を写しただけでは箱庭的な自然のコピーであり、芸術とは言い難い。そこで、日本庭園の造景は自然の中のポイントとなる要素を抽象化するのである。自然を写しながらも抽象化された自然だ。ここでは世界的な基準に照らして芸術と言えるためには、高度に抽象化される必要があると考へ、抽象化について定義する。

庭園が芸術であるためには、自然の素材を使いながらも自然を超えた形を創造すること、言い換えるなら、あるがままの自然ではなく人が感じた自然、単なる自然を抜け出した自然を超えたものを創造することが必要である。**言い換えるならば、「自然を一度解体して、作者による新しい造景を再構築」**することである。「造園」や「いけばな」のように造形物が自然に近い分野の創作活動は、素材は自然であっても、造形は自然を超えたものにする必要がある。出来上がった造形物に感動を覚える理由は、**生の自然の美しさにあるのではなく、その造形物に創造性があるからである。**

(抽象化度は、象徴と抽象庭園に大区分し、更に各々2区分した。詳細は [3 Theoretical kARESANSUI](#) の 4~6P)

2 日本庭園は各種の庭園形態があるが、大まかに 5 形態に別けられる。

日本庭園にもヨーロッパの庭園(フランスのベルサイユ宮殿・オーストリアのシェーンブルーン宮殿・スペインのアルハンブラ宮殿・インドのタージマハル宮殿)のような池庭もある。例えば東院(奈良市)・毛越寺(平泉)・二条城(京都市)・栗林公園(高松市)等であるが、何れも王侯貴族、将軍、大名、財閥などの権力者の庭で例外的な庭だ。日本庭園 BEST100 庭の対象は禅寺や一般市民が所有することが出来る庭で、以下の③④⑤を中心にした。

- ①道教の影響の不老不死への願望の庭：(鶴亀蓬莱の庭)
- ②大きな池庭のある覇者の庭：(貴族の極楽浄土の庭・将軍の庭・大名の庭・財閥の庭・元勳の庭)。
- ③禅宗の影響による「抽象枯山水庭園」；余白の多い抽象的配石による、考えさせられる庭。
- ④比較的巨石を使った「空間構成美の庭」；躍動的な構成の庭
- ⑤幾何学模様の庭：小堀遠州に始まり重森三玲が完成させた「直線・屈曲線・曲線・曲面・色彩の庭」

(庭園の形態についての詳細は [3 Theoretical kARESANSUI](#) の 1~3P 参照)

3 時代の影響による造形の変化

- ①奈良時代から平安時代(AD710~1185)：庭園の造形は自然の風景をデフォルメ(表象)した洲浜(添付写真 1)、荒磯(添付写真 2)、遣水が主体。但し、AD750 年頃作られた「須弥山石組」は中国の唐の影響が考えられる。
- ②鎌倉時代(AD1185~1333)に入ると禅宗の影響で「水墨画の鑑賞」の影響からか、立体的石組が多くなる。その代表は「龍門瀑」であるが、雛壇状の山畔への石組だ。代表的な庭園は西芳寺(添付写真 3)、天龍寺など。
- ③室町時代(AD1336~1573)の鹿苑寺(添付写真 4)に代表されるように、本格的に護岸への石組が始まる。
- ④室町時代の応仁の乱(AD1467~77)により京都是灰塵に化した。その結果、池泉庭園は勿論の事、大規模な庭園を作ることは不可能になった。禅寺では方丈の北側などに、石と砂による小さな庭が作られ、やがて、龍安寺(添付写真 5)が作られた。
- ⑤1603 年徳川幕府が確立(AD1603~1868)すると、治安が安定し、経済的にも豊かな時代になり、大名による大池泉庭園が競って作られるようになった。その代表は京都の二条城庭園(添付写真 6)、徳島城庭園(GardenNo24)であるが、巨石・珍石による「護岸尽くし」の庭が生れた。しかし、護岸の修景による造形はマンネリ化し、「脱護岸造形」が始まった。小堀遠州による金地院(添付写真 7)に代表される「護岸無き鶴亀島」である。この庭は枯山水であるから護岸は不必要になり、自由な形の鶴島、亀島が作られた。また芝離宮(添付写真 8)、栗林公園のように築山や山畔上への造形が生れ、更に玄宮園(彦根城)では池中への立石の分散配置などの空間構成美の庭が確立した。一方、江戸時代の抽象枯山水庭園にも見るべき発展があり、桂家(添付写真 9)、東海庵(添付写真 10)など優れた抽象枯山水庭園を生み出した。さらに江戸時代末期になるが、躍動的な庭として阿波国分寺(徳島市)、粉河寺(紀の川市)、旧久留島家(大分市玖珠町)も生まれる時代であった。

⑥重森三玲（1896～1975）は日本庭園を大改革した（作庭歴約 36 年、作庭数約 190 庭。庭園実測数約 360 余庭。著述数 75）。重森は日本庭園の大半を実測することで、古庭園の素晴らしさを再認識し、護岸無き枯山水庭園を東福寺（添付写真 11）に確立した。一方、ヨーロッパ抽象主義のマチス・カンデンスキーなどから感化を受け（その源流は日本の琳派でもあるが）、近代的で簡素な直線、曲線、色彩の庭を岸和田城（添付写真 12）・旧友琳会館などで創作した。

上記に記述した庭園の写真例



1 東院（AD750・奈良市）；栗石による洲浜の造形



2 浄瑠璃寺（AD1107・京都府）；荒磯の造形



3 西芳寺（AD1339・京都市）；傾斜地に龍門瀑の造形



4 鹿苑寺（AD1397・京都市）；護岸の本格的石組



5 龍安寺（AD1537・京都市）；抽象枯山水庭園の確立



6 二条城（AD1626・京都市）；護岸への石組の極致



7 金地院（AD1632・京都市）；枯山水のため護岸不要



8 芝離宮（AD1686・東京都）；脱護岸後の造形が築山に



9 桂家（AD1712・防府市）；江戸時代の龍安寺とも



10 東海庵（AD1814・京都市）；江戸時代の龍安寺とも



11 東福寺（AD1939・京都市）；護岸造形から自由な庭



12 岸和田城（AD1953・岸和田市）；モダニズムの庭